

方と一緒に出版されるのであればよろしくお願いします」という手紙をいただきました。

この手記は、中森氏が自分のたどって来た生涯を子孫に残したい気持ちから書かれたもので、まだ若い子供夫婦にも見せていないとのことですので。記録そのままをコピーしたものです。

(三重県 森 勇生)

シベリア抑留記

滋賀県 中島 信一

昭和十八(一九四三)年徴兵検査において第一乙種合格、現役兵として昭和十九年一月十二日に関東軍第七独立守備隊六一三部隊(野砲連隊)で、満州国富錦(佳木斯^{ジャムス})より四十里程北方にある(街)に赤煉瓦建の兵舎、広い練兵場あり、その周囲に馬房があるというここに召集を受け、字の区長様をはじめ字民の皆様方からの「歓呼の声に送

られて、今ぞ出で立つ父母の国」と歌声を聞きながら、旗の波を後に東海道本線篠原駅を後にしたのであった。

滋賀県人の召集兵は滋賀県庁に集合した。滋賀県の召集兵の部隊までの引率は富錦六一三部隊からお迎えに来ていただいた坂本軍曹殿であった。坂本軍曹殿の指揮で広島行きの夜行列車に大津駅から乗車して朝早く広島駅に着き、広島西練兵場に向かって行った。兵舎前に滋賀、福井、京都と一府二県の召集兵は全員現役で、百九十人位であり、点呼を終え兵舎に案内され、曹長殿の訓示、身体検査を終え、一泊して午前九時頃の汽車に乗り、午後三時過ぎには下関駅に到着して関釜連絡船の出航を待つことになった。

一府二県の現役召集兵の総指揮官は、六一三部隊よりお迎えに来ていただいた一人の曹長殿がとられるのであった。一時間三十分程待っていると釜山行きの連絡船の出航ということで釜山に上陸し、汽車で日本海側を朝鮮・満州の国境を越え満

州国佳木斯で下車した。佳木斯からバスに乗り、四時間程かかり富錦練兵場に着いた時には日はとっぷり暮れていた。

曹長の指揮により練兵場に入ってしまった。兵舎の前方既舎の前あたりに、兵舎に向かつて整列した。整列している前方に懐中電灯の明かりがチラチラと動いていたが、動いているのが静止すると、曹長殿が「懐中電灯のついている所が連隊長のおられる所である、連隊長殿に敬礼、カウナカ「頭中」と号令されたので全員礼に服従した。敬礼が終わる連隊長の訓示「君達は海山何百里離れたソ満国境の守りにつく、皆はここを墳墓の地と心得よ、終わり」と言われ、指揮官曹長殿より「頭中」の号令で礼を済ませた。私達現役召集兵はその位置において坂本軍曹殿より「六一三部隊の連隊長殿は高橋栄吉中佐殿である、それでは現役召集兵の所属される中隊名を発表するから」と言われ、発表していかれた。現役召集兵の所属中隊発表が終わり、各中隊毎に集合し、第一中隊は現在地にお

いて加藤曹長より、「第一中隊長田中大尉の野砲兵の訓練を拝受する。野砲教官小山少尉、通信教官高橋少尉、観測教官三好少尉、馬術教官斉藤准尉で先任者は三好少尉、それでは君達が寝起きする内務班について説明を溝落軍曹にしてもらうから勉強されたし」と言われた。

入隊後一カ月位経過したところで、野砲の目標に向けて狙い定める照準点の定め方、弾込め等、馬の御し方、通信線の使用等それぞれの教官の教授を受け始めることになった頃初年兵の身体検査があり、その時、私は隔離病棟に入院することになった。パラチフスという伝染病疑似ということであった。昭和十九年二月中頃であった。それから十日程過ぎたが退院命令はない。私の体調は別にどこも悪いところもなく元気に病棟で寝起きしている。後一カ月位たてば初年兵の一期の検閲があるので困ったことだと思い、早く退院させてもらわないか、と思いつながら病棟で気はせていたがどうにもならない。

そのうち一カ月は早くたつてしまい、一期の検閲が終わり、しばらくして原隊復帰となり我が中隊で教育を受けることになった。私は幹部候補生に合格するよう頑張ると父母に言つて入隊して来たので、一期の検閲を受けず落選と思ひ、故郷の父宛に、病気のため入院したから幹部候補生は外れる、外れても国家のため軍務に精励するから安心されたしと通信を出した。通信を出す時は検閲される。この検閲をされるのは高橋少尉であった。その後、高橋少尉が私を呼ばれ「中島君、幹部候補生の当落、何も心配なく勉強せよ」と激励の言葉をいただき、生きた心地がし、「頑張ろう」と思った。自後一期の検閲を受けられなかった初年兵は、小山、高橋両少尉殿に砲手、通信の教育をしていただき、一期の検閲を係官によりいただいた。中隊長をはじめ各係官の皆様衷心より御礼申し上げる次第です。

五月頃になり幹部候補生の試験があり合格し、幹部候補生として教官が付き教育されることにな

る。その後時々試験があり、私の念願かたつて甲種幹部候補生となり、昭和二十年二月二十日、六一三部隊甲種幹部候補生二十人の者は、私達同年兵の若井君が馭者班であつたから私達の荷物を橇に乗せ、安城予備士官学校に行く私達をも富錦の列車駅頭まで橇で送ってくれた。

その日のうちに安城駅頭に着き士官学校の門を潜つた。区隊長は猿渡少佐殿で、二人の中尉殿が教官として我々の指導に当たられるのであつた。

二月、三月、四月と過ぎた頃になると米軍の沖繩への攻撃も激しく、日本国土においては米軍のB29や航空母艦より戦闘機が飛来して、名古屋・大阪の軍需工場地帯や東海道本線の機関車を爆撃や機銃掃射を毎日のように浴びせに來る。戦闘機が來る度に警戒警報のサイレンが鳴つて、国民の皆様は指導者に引率され遮蔽しやへいしに行くという地獄絵みたのである。毎日のようにサイレンが鳴るといふことで、五月頃になると、日本国防衛のため我ら予備士官学校で教育を受けている者が内地

(日本国)の予備士官学校に転属して行くという事態になってきた。

私達残留組は六月中に予備士官学校を卒業した。十八日には牡丹江通信隊に行き大尉の中隊長さんにご挨拶を申し上げ、この通信隊で勤務場所の命令を待つことにした。二泊目の午前七時頃、中隊長さんの点呼後、勤務場所の命令をいただく。私を含め三人は、満州国の東方でソ連と満州との国境地帯琿春という所に部隊があり、その部隊に転属を命ぜられた。私達三人の者は中隊長の前に出て「三人の者は琿春部隊へ入隊のため直ちに出發します、敬礼」と私が言つて三人は拳手の敬礼をして兵舎を出て行き、琿春に向かつたのであった。午前八時頃の汽車に乗車したのでその日のうちに琿春部隊に入ることができた。が、部隊長が帰隊されていたから申告することができなかつたので、当夜は兵舎で就寝させていだいた。朝の点呼が終わり、私達三人は部隊長の所に申告することにした。兵舎より離れた丘陵地帯に

各中隊の幕舎の中隊事務所や兵隊の宿舎があるという。この兵隊から国境警備の兵が交代して国境を巡察しているのである。

私は第二中隊に所属されていて、十日位過ぎた頃、昭和二十年六月二十三日に沖繩が陥落し牛島軍司令官が切腹して全軍壊滅したので、ソ連は勢いを増し日本は窮地に追い込まれて来たので満州においても新設部隊の必要に迫られた。敦化に一三九連隊が、日支事変召集兵の解除になった方で満州、朝鮮等に住居を構え生活している人、また戦前より現在においても生活している方達で軍籍のある方等の中から部隊結成の必要人数を召集されて結成され、私と兵隊二十数人がその一三九連隊に転属命令が発せられたのであった。転属連隊までの引率者中島見習士官ということで私が引率して行くことになり、琿春部隊にはもう帰ることがないので、部隊長、中隊長に本日の命令を復唱して、丘陵地帯の森林の中を兵隊を引率して満州国境の平坦地に出て来た。しばらく休憩して、敦

化に向かい急行して行ったのであった。

敦化の街の東一〇〇メートル位離れた野原に幕舎があちこちに建ててあるのが一三九連隊舎だと気づき幕舎に向かう。来てみると門柱に「一三九連隊」と書いてあり、一〇メートル程行った所に衛兵所があり、全員その前に整列すると衛兵司令が出て来たので一同敬礼して、「中島見習士官以下何人、一三九連隊に転属を命じられ只今到着いたしました」と申し上げると、司令は「しばし待つて下さい」と言つて本部に連絡をとつてくれた。待つていると曹長が出て来て連隊長のおられる幕舎に案内してくれたので申告し、次いで大隊長、私達全員は第一中隊に配属されるのであるから第一中隊長の幕舎の前に案内し、中隊長に連絡をとつてくれた。中隊長が出てこられたので一同敬礼して申告すると、中隊長は「自分は松島秀二中尉である。君達は全員、第一中隊の隊員として勤務に精励せよ。終わり」と言われ、解散される。

中隊の兵には私は内務令の教授を、幕舎内の兵を二十五人位を一団とし、一団一団順番に幕舎内に集合させて行うことにし、また兵の使役の勤務状況等を視察し中隊長殿に報告することにしていった。

幕舎近くの平坦な野原で手榴弾、信号弾などを発射するため使用する擲弾筒の操作や匍匐前進の訓練に精励しているうちに八月になってきた。ソ連とは日ソ不可侵条約を結んでいると思つていたが、ソ満国境が緊迫情勢を呈して来たので、一三九連隊連隊長田窪岩松少佐、第一大隊長津田大尉、第一中隊長松島中尉、第一中隊第一小隊長中島見習士官、第二小隊長遊佐見習士官、第三小隊長室中准尉ということで我らの陣地を固められつつあり、敦化南東の方角三〇キロ程の地点、丘陵帯の所がもし敵と遭遇した場合有利と思ひ、偵察に一三九連隊長、大隊長、松島中隊長、中隊第一小隊長、小隊第一班長以下四人が午後一時過ぎ、丘陵帯より南二キロ地点に街があり満鉄駅もある

から、敦化駅から汽車に丘陵地帯に近い街まで乗車して、以後徒歩で丘陵地帯に到着し、休憩後再び徒歩で溝泥地や溜池、崖地等の有無や危険場所の調査をした。危険な所はなく、陣地構築には最適な場所である。連隊長はご満悦であった。

私は、今日は帰営せず旅宿をお取りになるだろうと思ひ、駅に下車した時、街に旅宿のある所を捜しにやっておいた。旅宿することになったので私と兵二人は旅宿に部隊長以下全將兵を案内した。夕食をし涼んでいると「ドドド」と爆撃音にする。間をおいてまた「ドド」「ドドド」とする。一小隊の一班長が私の部屋に来て、「アメリカのB 29が吉林を爆撃中でありませう」と報告に来てくれたので、私達將校と一人の下士官は連隊長室に行った。連隊長は「これから將校は全員連隊に帰るから、帰る用意ができたなら旅宿の玄関に集合されたし。下士官、兵は持ち帰る荷造り等準備の都合があるから明日帰隊されたし」と命令されたから、將校の方達は命令通達後四十分程過ぎた頃、

旅宿の玄関に集合された。連隊長がお見えになった時、連隊長から明日帰って来いと命令された軍曹が来て連隊長に不動の姿勢を執り敬礼し、「先に持ち帰る荷造り等あるだろうから明日帰るよう」と命令をお受けいたしました。が、持ち帰る荷造り等できましたから將校の皆様と一緒に連れ下されるようお願いいたします」と申し上げたので、連隊長から「よろしい、よくできた」とお褒めの言葉もいただき、將校と一緒に帰りなさいと言われていたので、軍曹はありがとうございますと言って敬礼した。帰る時も来た時と同じ態勢で一三九連隊に帰って行った。

部隊に帰ってみると兵は皆静かに眠っていて、副官が事態が事態だから連隊長の帰りを待っていたので飛んで来て連隊長に「本日八月九日早朝、ソ連軍が日ソ不可侵条約を破ってソ満国境を突破して、戦車M51を先頭にして満州領内を侵攻して来ている」ということで、国境地帯で満州開拓義勇隊として渡満して、現在満州開拓団として開拓

に従事されていた一団が、侵攻して来るソ連軍の前に逃げ惑う日本の移住民を連れ、指揮しながら牡丹江へ向かってやって来るといふ情報を得て、さすが義勇隊であった皆様だと心強く思い、今は関東軍の主力は南方戦線にあるが「よし戦を」と、決意を新たにするのであった。

一三九連隊兵士は、練兵場に八月九日午前十時に呼集され、ソ連と交戦状態に入ったから諸氏は軍務に精勵し敦化を死守されんことを望むと訓示され、解散しそれぞれの勤務につき自後の命令を待つことにした。

急いでいる時の日の過ぎて行くのは早いもので、はや八月十五日になった。私の小隊の第一班長が午後四時頃、私の所に来て「敦化の街を通った時、民衆が屋外のラジオの前でラジオを聞いている。民衆達が天皇さんとか陛下とか言っている」と不思議なことを言ってくれるので、私も何のことかと思っていた。

連隊副官が「一三九連隊、練兵場に軍装して直

ちに集合」と命令を持ってきた。いつも装備は整えているので軍装するのに何も心配することはない。く三十分位で連隊集合は終わり、連隊長が「只今より下命布達式を行う」、ラツパ手が「君が代」を吹奏する。次に連隊長と連隊将兵一同向かい合い、双方同時に、連隊長は抜刀して敬礼し、連隊長は「捧げ銃」の敬礼をする。連隊長は「一三九連隊は田窪岩松が指揮をとる。終わり」と言われる。次に第一中隊長が抜刀して敬礼し、一中隊兵「捧げ銃」の敬礼をする。「一中隊の指揮、松島秀二中尉がとる」、第一小隊も第一中隊と同じよう敬礼し、小隊長も氏名を言って指揮をとると言って、布達式は午後五時三十分過ぎ終了した。

午後六時頃、再び一三九連隊の呼集がかかり練兵場に集合してみると、連隊副官の方から、ソ連軍が戦車を先頭に牡丹江に向かって驀進中、よって我が軍は迎え撃つため我ら一三九連隊は全員トラックに乗車して牡丹江に向かい出撃するという命令が出され、第一中隊第一小隊長である私が先

頭トラックに乗車し、部下達も乗車させ牡丹江に向かった。一晩中トラックは明かりをつければ敵に察知されるから明かりを消して、人が駆け足する位の速さで静かに進んで行った。東の空が白んで来た。しばらくすると森林に囲まれた平地が見え、連隊司令の方からその平地に入り休憩するという命令が来たので休んでいた。

私達の連隊の上部には兵団があり、富永中将が兵団長であった。その上に関東軍司令が置かれていた。この当時、関東軍司令所は新京（長春）から通化に移動されていた。私達が休憩している所へ師団参謀がやって来て、停戦されたから部隊に帰りなさいと言って来た。停戦と聞かされ、よかったですと思った。部隊全員、敦化に引き揚げた。敦化の上空を飛行機が胴体に白布を巻いて旋回しているのにびっくりした。白布を巻くということ、停戦ではなく敗戦だと思った。

敦化に帰営してからの宿舎は校舎か寮舎であったか、風雨に困るような建築物でない所に一三九

連隊の大尉から見習士官までの者が一緒に寝食するようにされた。下士官、兵も寝食を共にするよう、校舎か企業の寮舎等に一緒に入ることにされた。関東軍司令官山田乙三殿より「天皇陛下の命により、八月十五日、連合軍に対して無条件降伏をすることに決まった。戦闘していた部隊は白旗を掲げてソ連軍に降伏し武器を引き渡すべし」と命令されるということであった。

七日程過ぎた頃、シベリアにいるソ連の兵隊が私達の宿舎に下士官一人、兵隊二人でやって来て「ドラスチェ」と言つて下士官が手を出すから、本日の当番の見習士官が握手すると「スパシーボ」と言つてにつこり笑みを浮かべる。そこへ日本軍将校のロシア語の通訳が来てくださったので、やれよかったですと溜飲が下がる。ソ連兵にしても同じだと思う。当番の見習士官が、よくおいで下さつてありがとうと言つと、ソ連の下士官が、私達は赤軍の命令により行動しており、日本軍の皆様は天皇陛下の命令により行動しておられるの

で、私達は仲よくしましよと言われていると通訳の方が言ってくださり、ソ連兵の三人の方が手を出し握手を求められるので当番の見習士官三人は握手を交わした。ソ連軍のシベリアに派遣した将兵は、ドイツとの戦争が終結してソ連がドイツに戦勝した時の将兵と囚人を部隊として派遣して来たと聞いていたから、いろんな兵がおられるのだろうと思う。

九月上旬に入り私達将校は、敦化の西北三キロの所に丘陵地帯があるので、そこに天幕を張って幕舎を造り移転することになった。移転するのに先立ち下士官、兵はソ連軍が敦化に駐留して来た時に一三九連隊本部にソ連軍の将校が七、八人の兵隊を連れて武器集積場を指定しに来て集積させたのであったが、我々将校のピストル、軍刀等は、我々の寮舎に一室を設け、そこに集積するということにされた。その管理はソ連兵に委ねられているので、何も心配することなく移転した。

幕舎に移転して一週間過ぎた頃、ソ連の下士官

と兵三人に日本人の通訳が一緒に来た。何か困っていることはないかと下士官が言っていると通訳されたので、塵紙が不足しているので戴きたいのですがと幕舎にいる少尉が答えたのを通訳がソ連の下士官に伝えると、下士官帰營の翌日、塵紙が二メートル四方の木箱に詰めて送られてきた。

幕舎で生活していて、日本はどうなっているだろうと毎日思っている。今日は秋分の日であると思いつながら舎内の清掃をしていると、ソ連軍の兵隊と日本軍の通訳が幕舎内に入って来て、通訳が全員集合して下さいと言うので幕舎中に集まった時、ソ連兵は「ヤポンスキー、ハラシヨウ、東京ダモイ」と言うので、将校達は皆本当かと疑問を持たれた。通訳に日本に本当に帰れるのですかと尋ねるが、通訳は、日本に帰ると言っていますね、と言うだけである。最後にソ連兵が「牡丹江から汽車に乗るから、各自の荷物は忘れずに身の回りを整えられよ」と言うので通訳はその通りに伝えてくれる。秋分の日は暮れ、幕舎で寝るのも

今日限りでお別れと思いがら寝ることができた。朝食に粟の粥食をとり、黒パン三五〇グラム一つをもらい、「牡丹江に出発するから持ち物は忘れ物のないようまとめ出発準備せよ、終わり次第出発する」と命令が出された。

一週間程かかり牡丹江駅に到着した。駅の広場で人員の点呼がされたが異状はなかった。牡丹江駅には有蓋貨車がたくさん停車していた。私達を誘導して来たソ連兵は私達に東京ダモイ、ハラシヨウ、ハラシヨウと言うが、半信半疑であった。

有蓋貨車を二段にし、乗降する扉の所は二段にせず開けておき、上段に上る乗降口にした貨車を駅構内に入れて来た。敦化から来た日本軍輸送の有蓋貨車に乗車を終わり、他の将校集団のやって来るのを待ち合わせている。次第に日は西の端に落ち、時は刻々と過ぎてきたので貨車の中で一夜就寝することになった。朝起きてみると貨車の外はがやがやと騒々しい。下段の方が戸を開けられ

ると駅構内外に将校服を着た連中が大勢いる。この方達と同乗するのだ。私達より何倍かの人ではるかに多い。

同乗して来られ私達は朝食どころではなく、全員乗車を確認されしばらくして発車したので、皆黒パンを食べながら「ウラジオストツクに行くのか、本当か」とガヤガヤはしゃぎながら汽車に乗って行く。満州国内の大きい各駅に停車しながら将校服を着た捕虜を乗せて走る貨車は、満州国境を越え南進するのかと思っていると北進を始めた。「東京ダモイ」の言葉は夢の中を去って行き、

希望もなく「ナルヨウニナレ」と思い、貨車はシベリアに向かっていく。白一色に覆われているシベリアを西に走りバイカル湖畔を一昼夜走り、古都イルクーツクに着き、用便を一行横隊に線路の脇でする。捕虜の浅ましきである。用便を終え列車の人となり、ノヴォシビルスク、オムスクと大雪原を走り、ウラル山脈を越えヨーロッパの黒土地帯に入り、ボルガ河を渡り十月三十日午後五時

頃、モスクワ東南のタンポフ市郊外ラーダの森に、牡丹江を出発して二十八日目に到着した。

この森にある収容所は、ヒトラーがモスクワ攻略をした時、ソ連軍の陣地として白樺林の中に飛行機からも見えないように造った半地下式の土窟兵舎で、日光の入る窓もない。至近距離でない顔の判別も困難。不衛生な宿舎で、寢室兼食堂で着の身着のまま、外套を掛けて隣人と触れ合って寝る。便所も屋外に出るといふ不便なものであった。午後七時頃になって自分の寢室が与えられた。自分に落着きが出てきた。一三九連隊佐官・尉官の将校は全員ラーダの半地下式の土窟兵舎に入り、佐官・尉官と宿舎を区分され、午後七時三十分過ぎ呼集がかけられ、舎内通路や宿舎の立てる所に立つことにし点呼をとられたのであった。宿舎の世話役さんも大変ご苦労さまで、感謝申し上げます。

私達ラーダ収容所の日本側の責任者は陸軍大佐殿であり、点呼後責任者の方が、日本内地に帰る

までは何事も隠忍自重して助け合いながら暮らして下さいと挨拶され、解散して就寝することになった。翌朝起床を午前七時にして洗面を終え、燕麦のカーシャをいただき、八時より世話役から本日の過程についての説明がありました。その中で、将校は一切労役は課せられない、自活のみの仕事と世界の捕虜規約になっているから、炊事で食べ物煮熟する材料は森林に折れ枝拾いに毎日四百人くらい交代で拾いに行くことにしますからよろしくお願いいたします。ソ連政治部の将校から身上調査を受ける方は前日の午後六時過ぎに土窟兵舎の世話人が言ってくるから、枝拾いは翌日は除外されるということである。

一カ月二カ月と過ぎて行き、七月に入り、ラーダ収容所を出発し、シベリア方面に行く路線の駅に向かって行軍を半地下式の土窟兵舎にいた将校達二千人ほどが開始した。

午前九時頃出発して午後四時頃、ソ連兵の誘導により街の中に道幅五十メートルくらいある広い

道の突き当たり大きな駅舎が見え、近づくとつれ有蓋貨車が引込線に幾貨車も入っているのを見ながら駅の構内に入って来て休憩すると、誘導して来たソ連兵が「東京ダモイ、東京ダモイ」と言うから、嘘だと知りながらもよい方に「本当か」と思う。これ人間本来の感情だと思う。本線に幾車両も連結した貨車が引込線から入って来た。貨車はシベリアの方向に向かい停車している。停車している時、私達は全員貨車に乗った。六日目位だったと思うが、「エラブカ」に着いた。ボルガ河の支流カマ河のほとりにある街で、帝政ロシアの囚人を絞首刑にした跡地であり、ここがドイツ兵を射殺した場所だという銃弾の穴が多く煉瓦塀に残っている古い赤煉瓦で三階建ての建物、この収容所に、早くから来ていた将校集団もありAとBのグループに分かれていたが、私達ラーダから来た将校集団はAのグループに入った。

私達将校集団は毎日交代交代で枯木拾いやコルホーズ農場のカルトーシカ（馬鈴薯^{ジャガイモ}）畑の除草、

揚水散布等を行う。ソ連政治部将校は毎日身上調査をし、調査を受ける者は前日の夜の点呼の時に通達されるので翌日の作業は除外される。ソ連の政治部将校の女性のクロイツルという方は、一般日本人には好意を持っていたが、彼女の狙った特務機関員・憲兵・警察官・情報関係者等を見逃すことはなかった。その頃、「日本新聞」（ハバロフスク発行）の啓蒙による民主化運動が盛り上がっていた。財閥、地主らの搾取の実態、軍閥に対する批判等についての話し合いの場が各棟で行われるようになった。枯木拾い等は午前中に終了して午後は何もすることがなく、囲碁をしたり、また碁の上手な方に碁を習ったり、「切れ地」で碁盤の目をつくり碁を習う人等が出て来て、一時を楽しまれるという。政治部の将校クロイツル殿は、碁や将棋等を指しているのを見て「ニッ」と笑顔で通られるという。

五カ月ほどたち、民主グループが幾つかできてきた。また演芸班もでき、落語、漫才、講談、寸

劇、歌謡曲等、日曜日等は割り当てられた使役等は別とし、他は各民主グループや演芸班等が演じられる。また図書館等も造られているから、そこにチャイコフスキー、トルストイ、レーニン等の書物等を読みに行かれる方もあり、一日を有意義に過ごされる。次第に将校の方々と懇意になることができ、ありがたく思った。

Aのグループに入った将校集団の中に真木大佐がおられ、師団参謀の肩章をつけ将校集団の中を時々闊歩しておられる姿を見たことがあった。体は大きく太っておられるので堂々たる容姿である。私は、先に私達のラーゲルにいる中尉殿が身上調査を政治部将校のクロイツル女史に受けた時、クロイツルさんは「皇祖皇帝」と書かれ、この字を日本ではどう読みますかと問われたので「クワウソクワウソウ」と読むと申し上げたら、ソ連では「オウソオウソ」と読みますとおっしゃって、日本はまだまだ民主主義はソ連より百年ほど遅れている、ソ連にしても今は社会主義国

家で、共産主義国家は道徳的な人々の集まりでないといけないので、今現在においては「皇祖皇帝」をお護りして行かれるのがよいと思うと言われたと聞かされた。真木大佐が身上調査を受けられた時、大佐は、日本は自存自衛のための軍隊を作らないといけないと包み隠すことなく申されたということ聞かされた。

昭和二十二年の正月を迎えた当初に、私達のラーゲルの責任者が真木大佐殿に交代されたのであった。真木大佐殿は嘘や上手を言う人でないので、クロイツル政治部将校さんの信頼は厚かった。

昨年同様、私達は炊事の煮炊きをする枯枝拾い、幹の枯れた樹木や伐採されてある樹木は樫を持って行き持ち帰る。またコルホーズに行き馬鈴薯畑の除草等の作業に従事してうち十月になった。八日に同じラーゲルにいる少尉が、この間まで作業していた兵隊がソ連将校の「ヤポンスキー・ダモイ・ダモイ」とソ連将校に身支度させ

られ、このエラブカの収容所を六日に出発したと言ってくれたので、我々のダモイも間近だろうと推測するのであった。

推測も間違いなかった。Aのグループの将校集団は十月二十五日エラブカを出発し、二十数日の長い旅でナホトカ港へ到着した。やれやれと思つたが、気を緩めて病気が出ては大変と思ひ「次は何か」と考えるように、また自分の父母、兄弟はどうしているだろうと思ひながら、ナホトカ港より輸送船「高砂丸・吉林丸・明優丸・永徳丸」等に乗船した。今を遡ること五十五年になるから、輸送船はたくさんあつて当時は船名を覚えていたが現在は思ひ出すことができず、七千トン級の輸送船であつたと思う。

舞鶴に上陸し、引揚証明書舞鶴援護局に渡し復員した。舞鶴で身体検査や診断を受け帰宅準備して、舞鶴駅から京都駅で乗り換え篠原駅に午後三時三十分頃到着した。郷里に着いて母を見た時、しばらくは無言で、熱いものが込み上げて来

るのみであつた。

抑留記

京都府 野村 喜与四

出生記

私の生まれたのは百万石城下町、金沢市彦三町、大工の棟梁野村清作・妻せきの第五子四男として大正十二（一九二二）年三月十一日の生まれ。大正十二年は関東大震災の年、後に震災の子と呼ばれたりしたが本人は何の実感もないこと。幼児の頃の大きな出来事は、彦三の大火という八百戸も焼失した火事に遭つたこと。三女の栄子を乳母車に乗せて姉兄妹と親戚の家へ避難する途中では、大きな火の粉や燃えた木っ端が飛んで来る真つ赤な空を見ながら、地獄極楽の絵図を見た幼い記憶そつくりの経験。父母と兄二人のことは後の体験談を聞いた遠い昔の懐かしい話。我が家も